

# ケベック詩の誕生<sup>1)</sup>

## Births of Québec Poetry

ナタリー・ワテューヌ  
WATTEYNE Nathalie



**Key words:** ケベック詩、文学史、アンヌ・エベール、ガストン・ミロン、ジャック・ブロー  
Québec poetry, literary history, Anne Hébert, Gaston Miron, Jacques Brault

### Abstract

In this paper, I will present in general terms the development of Québec poetry, from the beginning to this day, and then focus on three major twentieth century poets: Anne Hébert, Gaston Miron and Jacques Brault, all involved in the historical passage from isolation and silence to discovery of the power of the word. I will examine the most important poem of the collection, *Le Tombeau des Rois* of Anne Hébert, then l'«Art poétique» of Gaston Miron, and finish with Jacques Brault's collection of poems, *Mémoire*.

## 1. はじめに

本稿の目的は、ケベック詩の起源から現在までを概観した後、ケベックが沈黙と孤独から脱して発言権をもつようになった時代を代表する3人の現代詩人、すなわち Anne Hébert、Gaston Miron、Jacques Brault がもたらしたものを詳細に考察することにある。後半では、これら3人の詩人たちについて、まず初めに Anne Hébert の詩集『王たちの墓』の中でもっとも注目されている詩を読解し、その後 Gaston Miron の「詩法」に触れ、最後に Jacques Brault の『記憶』を分析するが、まずは、それらの詩人の言葉がどのような歴史的・文化的状況から誕生したのか跡づけてみたい。

## 2. 起源から 19 世紀まで

アメリカ大陸で書かれた最初のフランス語詩は Marc Lescaurbot によるものである。それは 1609 年にパリの出版社から上梓されたもので、『ヌーヴェル・フランスのミューズたち<sup>2)</sup>』というタイトルの詩集だった。ピンドロス風を真似たオード<sup>3)</sup> がフランス王に捧げられ、そこにはギリシア神話の人物たちとフランス兵士たちが交互に登場する。けれどもそれは、「詩句」で書かれていたとはいえ、反響を呼ぶような何らかの状況に根ざした「詩」からはほど遠いものだった。それらの作品は啓蒙的なもので、フランスの偉大さを、その王や勇敢な兵士たち、そしてもちろん貴族も含めて、褒め称えるものだった。

18 世紀になると、ヌーヴェル・フランスの住人たちは軍事的・政治的な敗北を喫し、そこからなかなか立ち直ることができなかった。簡単に事実を要約すると、オーストリア大公領とプロイセン王国、フランス王国とイギリス王国が対立したのに引き続き、1756 年 5 月 18 日にイギリスがフランスに宣戦布告する。7 年戦争の始まりである。このような状況の中で、イギリス海軍の 49 隻の軍艦と 8500 人の兵士がセントローレンス河に到着し、1759 年 6 月 26 日、ケベック市の攻囲戦を宣言する。攻囲された「カナダ人<sup>4)</sup>」は町を守るが、1759 年 9 月 13 日、アブラハム平原での戦いとなり、Louis-Joseph Montcalm 総司令官率いるフランス軍は敗北する。モンカルム総司令官は戦死し、そのみか、イギリスの James Wolfe 将軍も戦死する。1 年後、モンリオールで Vaudreuil 総督がフランスの名において北アメリカの領土をイギリスに委譲する。ただし、カナダ人たちは信仰の自由を行使できるという保証をとりつける。1763 年 2 月 19 日にパリ条約に調印するまでの軍事占領下で、カナダ人たちはイギリス帝国の臣下になる…。こうしてヴォルテールがカナダについて語りながら言った有名な言葉を借りるならば、「雪におおわれたわずかばかりの土地」がカリブ海のサトウキビ畑と交換にイギリス王のものになったのである。

18～19 世紀を通じて、文化的記憶は詩や歌、短い物語や伝説に乗せて代々受け継がれていく。それらは起源となるフランス（といっても、イギリス人にカナダを引き渡したフランスではないが）にたいする深い郷愁の念や強い愛国心を表現したものである。フランス詩を手本にして教訓

的な作品をつくるへば詩人たちはたくさんいた。この時期はまねごとが多かったのである。もともと流行した詩は、「森を駆ける男たち<sup>5)</sup>」が歌っていた「清らかな泉で」や、小舟で旅をする人たちが口ずさんでいた「旅人たちの歌」など、フランスの伝統的な歌だった。折々の詩が多数つくられるが、独自の現実と風景をもった本物のケベック詩が誕生するのは19世紀末になってからである。

1837年、ロワー・カナダ（現在のケベック州にあたる）の愛国主義者たちと隣りの植民地アッパー・カナダ（現在のオンタリオ州にあたる）の反乱がイギリスを揺さぶり、戒厳令が敷かれることになる。ロワー・カナダの多くの反逆者たちが亡命し、さもなければ追放されるか絞首刑に処された。政治改革が必要であることが明らかになる。1839年の報告書でDurham卿は、フランス系カナダ人は多数派のアングロサクソンに同化させるべきだ、と強く主張する。そして、1840年の連合法により、2つの植民地は統合させられる。その後、経済的理由と、独立を勝ち取ったばかりのアメリカ合衆国が攻撃してくるのではないかという不安から、イギリスは北アメリカ大陸のすべての植民地を統合して1つの国をつくろうとし、政治的にはそれが連邦の結成となる。1867年、連邦はニューブランズウィック、ノヴァスコシア、オンタリオ、ケベックの4州によってつくられることになる（現在のカナダは10州と3領土から成る）。

### 3. ケベック市の愛国主義とモンリオールの詩的再生

19世紀を通じて自由主義者と保守主義者が政治的問題で分裂するが、それによってフランス系カナダは愛国心を刺激されることになる。若者たちも、そうでない人たちも、国民文学をつくらうとし、それが1860年の文学運動の誕生につながる。ケベック市の本屋で急ごしらえの「セナークル（文学・芸術の小グループ）」がつくられる。当時人々はとくにChateaubriand、Hugo、Lamartine、Mussetといったロマン派の作家たちの作品を読んでいて、本屋を経営し、詩人でもあったOctave Crémazie（1827-1879）がフランスから本を取り寄せていたのである。彼はその後、借金取りに追われてフランスに逃げてしまうが、亡命先のパリからも、ケベックに残した家族や友人に宛てて手紙を書いており、その中でカナダの文化を擁護している。彼の弟子であるLouis-Honoré Fréchette（1837-1908）はジャーナリストで、作家で、代議士でもあったが、彼もまた、カナダ人たちの輝かしい過去をなつかしむ。CrémazieとFréchetteは北アメリカ大陸での現実を詩句によって表現するが、Crémaziのほうが親密で感情のこもった調子なのになんか、Fréchetteのほうが、よりもったいぶった調子である。たとえばそれは、Victor Hugoの『諸世紀の伝説』を手本にして書かれた『一族の伝説』（1887）という叙事詩に見られるものである。Fréchetteはそこで、アメリカ発見や、アブラハム平原の戦いでの敗北、イギリス人たちに征服された後のカナダ人の生活などについて語っている。けれども、このような雄弁調は今日ではあまりに誇張しすぎと思われるもので、新世界にはふさわしくなかった。Pamphile Lemayは英雄的な行為に夢中になったもう1人のケベック詩人だが、彼は1865年にロングフェローの『エヴァ

ンジェリンヌ<sup>6)</sup>』を翻訳している。

勇ましい詩句によって、失われた祖国の偉大さや祖先たちの勇気を褒め称えるこうした作家たちの傍らには、郷土文学、すなわち木樵や筏士や農業従事者たちの農村での日々を綴る、大地に根ざした文学を实践する作家たちもいる。さらに、もっと内面的な詩を書くことに没頭する者もいる。Eudore Évanturel (1854-1919) は、その『最初の詩』(1878)において、孤独や死という普遍的なテーマを感性豊かに取り上げている。同様にして、歴史家 François-Xavier Garneau の息子にあたる Alfred Garneau は、1906年に簡素で透明感のある『詩』を発表する。

モンリオールが経済的、文化的に発展してくると、文学活動の中心もケベック市からモンリオールに移り、大きな変化が生じる。1895年11月に結成されたモンリオール文学派は、詩の再生を願う30人ほどの作家たちによってつくられたグループである。彼らの中には、象徴派や高踏派<sup>7)</sup>だけでなく Baudelaire も読み、新しい形式に非常に強い関心を示す詩人たちもいる。若き Émile Nelligan (1879-1941) はそのもっとも著名な代表者であり、今日なお、卓越した詩人として神話化されている。Rimbaud 同様、彼は16歳から19歳まで詩を書き、するどい感性を表現するための「形式」に専念する。Baudelaire と Verlaine をよく読んでいた彼は、音楽や韻律法を重視する。1899年5月26日、モンリオールのラムゼー城で「酒のロマンス」という自分の詩を朗読した後、精神病院に収容され、40年後に亡くなるまでそこで過ごすことになる。この詩は9つの4行詩から成っているが、以下はその最後の2節である。

ぼくは陽気だ！ ぼくは陽気だ！ 5月の夕べよ 万歳！  
ぼくは酔っ払ってなんかいないのに、ひどく陽気だ！  
やっと生きるのが幸せになったのだろうか、  
ぼくの心は失恋からやっと立ち直ったのだろうか？

鐘が鳴った、夕方の風がかぐわしい…  
そしてワインが楽しくあふれ出すあいだ、  
ぼくはカラカラと笑ってとっても陽気、とっても陽気だ、  
ああ、陽気すぎてすすり泣きを始めるのではないかと不安だ！

(Nelligan, 1903, 1945, p.221)

疑問文や感嘆文が巧みに使われる中で、思春期という人生の難しい時期に特有の苦悩と憂鬱が、生きることにたいする熱狂的な願望と緋い交ぜになる。

20世紀初頭になると、詩人たちは2つの陣営に分かれる。カナダ的価値観や土地を褒め称える地方色豊かな詩人たちと、ヨーロッパにたいして開かれ、カナダの芸術や文学以外のものに言及しようとする異国趣味の詩人たちである。敵方から「パリっ子風」と皮肉られる人たちは、芸術の自律性を尊重する。それは1918年に創刊される『ニゴグ<sup>8)</sup>』という文学創作のための雑誌でも

証明されている。異国趣味の詩人たちとともに、人々は内向した郷愁の念から少しばかり抜け出す。彼らはいわば、世界と他の文化にたいして開かれたいというわれわれの願望を刺激するのである。

両次大戦間にケベックは近代化するが、そのことによって、1929年の経済危機前後には、多くの失業者と貧困を招くことになる。農業従事者として例外ではない。Alfred DesRochers（1901-1978）が『オルフォールの陰で』（1930）という詩集の中で語っているのも、フランス系カナダ人の厳しい生活条件である。恵まれない人たちに味方しつつも、人々の誇りや勇気、そしてケベックの自然の美しさを描くことを忘れない。

2人の孤高の詩人——一方はアジアやヨーロッパを頻繁に旅した人で、他方は出歩かない孤独な人だったが——が今日、ケベックの近代詩を生み出した主要人物と見なされている。Alain Grandbois（1900-1975）の豊かで荘重なリズムは、非常に散文的な Hector de Saint-Denys Garneau（1912-1943）とは対照的である。しかしながら、この2人の詩人は親しみやすい話題を選び、自由詩で書いている点が共通している。自由詩はフランス系カナダでは新しいものだった。

1937年、Hector de Saint-Denys Garneau は唯一の詩集である『空間における視線と戯れ』を自費出版する。この詩集には、サント＝カトリーヌ＝ド＝フォサンボーのなじみの風景が描かれているが、言葉は極限まで切り詰められ、詩句は究極まで緊張している。この小さな町はケベック市から40キロほどのところに位置する、周りを湖や川、森に囲まれた美しい田舎だが、彼はこれを詩だけでなく絵画にも描くようになる。さらに重要なのは、Garneau が自然だけでなく精神的なものについても語っていることだ。謹厳で、しかも傷つきやすく、けっしてへつらうことのない彼の内面をよく示している。もっとも頻繁に話題になるのは、やっと保たれている精神的均衡である。それはたとえば彼の有名な詩「同伴」にも現れている。これは、魅力的であると同時に不安を駆り立てる「分身」をテーマにした詩だが、打ち明け話のような調子で語られている。

ぼくは喜びの横を歩いている  
しかしその喜びは自分のものではない  
自分の喜びでありながら、手に入れることのできない喜び

ぼくは喜んでいる自分の横を歩いている  
自分の横を歩く喜びに満ちた足音を聞く  
しかしぼくは歩道で場所を変えることができない  
それらの歩みの上に自分の足を乗せて  
さあ、これがぼくだ、ということができない

さしあたりぼくはこの同伴で満足する  
しかしひそかに交替をもくろむのだ

あらゆる操作、錬金術によって、  
輸血  
元素の移転によって  
バランスの変化によって

ある日、順序を入れ替えられ、  
この喜びに満ちた歩みのダンスによって自分が運び去られるために。  
そのときすぐ横にある自分の歩みの音は小さくなり  
交差する道を行く  
見知らぬ人の足もと、  
ぼくの左側で途方に暮れたぼくの歩みは  
青白くなって消えてゆくのだ。

(Garneau, 1937, p. 79)

しかしながら、飾り気のない彼の詩句は理解されず、みずからの信仰にも社会的な交流にも積極的になれなかったために、死ぬまで孤独の中にこもることになる。彼は1943年10月24日、カーヌー競走で疲労したあと、心臓麻痺で突然死亡する。

女性にとっても1930年代に状況が変わり始める。Jovette Bernier、Simone Routier、Medjé Vézinaといった人たちを挙げることができる。彼女たちは好んで官能や愛について書いた。しかし、Maurice Duplessisの保守政権は、ケベックの進歩的な勢力にたいしてまだ強い圧力をかけている。この時代は暗黒時代と呼ばれており、婦人参政権は1940年になるまで与えられない。その頃、2人の女性詩人が注目されるようになる。神秘体験を歌うRina Lasnier（1915-1997）と、国にのしかかる死の沈黙をさまざまな方法で喚起するAnne Hébert（1916-2000）である。

#### 4. 『王たちの墓』あるいは死者たちの追放

従兄のSaint-Denys Garneauの『空間における視線と戯れ』が出版されたとき、Anne Hébertは20歳だった。彼女はのちに、この詩集を読んだときのことを「啓示を受けたようだった」と語っている。飾り気のない自由詩や、孤独というテーマ、骨や鳥がよく登場する点などについていうなら、Garneauの影響は明白だ。けれども、彼女は『王たちの墓』（1953）で独自の声を発見する。この詩集によって、彼女はAlain GrandboisやSaint-Denys Garneauと並ぶ、20世紀フランス系カナダの主要な詩人の列に加えられることになる。

シュルレアリスムの訪れとともにケベックでも自動記述が盛んにおこなわれたのだが、1950年代、Anne Hébertは決然と未来のほうを向くようになる。彼女は自分のまわりにいる死者たちを追いだそうとするのだ。最初の詩集『釣り合った夢』では、彼女は亡霊や死の舞踏に魅惑されていたが、『王たちの墓』ではそこからさらに一歩踏み込み、吸血鬼たちと対決するようになる。

ときに1人称の「私」、ときに3人称の「彼女」で語る人物は、狭い空間に閉じ込められているが、そこで苦悩に沈み込まないために受け身的な夢に身を任せる。けれども彼女の手は「苦しみ」でできており、その「骨」は皮膚の代用だ。そこで歌われる歌はせいぜいのところ「鳥のうめき」で、夜は一時的な避難所にすぎない。「いかなる風のざわめき」にも動かない都市は、森や川や湖以上に魅惑的なわけではない。それほど、それらの都市が吹き込む不安は激しいのだ。いたるところからやってくる脅威を前にして、若い女性はできるかぎり安心しようと努める。「あの深い森には行かないことにしましょう／奥のほうに眠っている／大きな泉があるから (Hébert, 1953, p.13)」。そして自分の内面世界と夢想に戻っていく。「石の下に埋め込まれた頑固な生命」が、「世界の裏側」からでないとしても、見放された世界で自己表現するのである。

1942年から1951年に書かれたすべての詩の中で、「王たちの墓」は彼女の言うところによれば「げんこつを一発食わされたように (Hébert, 1975)」突然彼女に取り憑いた詩である。ここでは、エントロピーの力を体現する横臥した者たちに「若さ」が立ち向かうのを見ることができ

#### 「王たちの墓」

わたしは拳の中に自分の心臓を握っている。  
それはまるで目隠しされたタカのような。

わたしの指にとらえられた無口な鳥  
ワインと血でふくれあがったランプ、  
わたしは降りていく  
王たちの墓へ、  
生まれたばかりの赤子のように  
驚きながら。

物音ひとつしない迷路に沿って  
アリアーヌのどんな糸がわたしを導くのか？  
足音の響きが次第に消えていく。

(どんな夢の中で  
この少女は、射すくめられた奴隷のように  
くるぶしをつながれていたのか?)

夢の作者は

糸をせき立てる、  
すると裸の足音がやってくる  
一步一步  
井戸の底に落ちる  
最初の雨滴のように。

すでに匂いはちきれんばかりの嵐となって流れている  
組み込み寝台が並ぶ  
円形のひそかな部屋の扉の下から  
しみ出している。

横たわる者たちの不動の欲望がわたしを射貫く。  
わたしは驚きながら眺めるのだ  
黒ずんだ骨に直接象嵌された  
青い宝石が光るのを。

念入りに作り上げられたいくつかの悲劇が、  
王たちの胸の上に横たえられ、  
宝石の代わりに  
涙も後悔もなく  
わたしに差し出される。

一列に並べられた  
香の煙、ひからびた米菓子  
そしてわたしのふるえる身体、  
儀礼的で従順な捧げ物だ。

わたしの放心した顔の上の黄金の仮面  
瞳の代わりの紫色の花々、  
わずかばかりの愛がはっきりとした短い線でわたしに化粧をほどこす、  
そしてわたしが握りしめているこの鳥は  
呼吸し  
風変わりなうめき声をあげる。

木から木へと吹き渡る風にも似た

長い戦慄が  
 蔽かできらびやかな棺におさめられた  
 黒檀と化した7人の偉大なファラオたちを揺り動かす。

それは執拗に存続する死の深みにすぎない、  
 犠牲にされた肉体のまわりで  
 空しいおもちゃである  
 腕輪をかちかちと鳴らしながら  
 最後の苦悶を真似、  
 安らぎと  
 永遠を探し求めている。

わたしの内なる悪の、親愛に満ちた泉に飢えた彼らは  
 わたしを横たえ、わたしの泉から水を飲む。  
 7度、わたしは骨に万力を感じる  
 そしてわたしの心臓を探し当て、引きちぎろうとするひからびた手を。

恐ろしい夢をたらふく見させられて青ざめたわたしは  
 今や手足をほどかされている、  
 死者たちは暗殺されて、わたしの外にいる、  
 どんな夜明けの光線がここをさまよっているのだろう？  
 瞳をくりぬかれ  
 震えながら朝のほうを向いているこの鳥は  
 いったいどこから来たのか？  
 (Hébert, 1953, pp. 71-73)

この詩は政治的、宗教的エリートたちによる束縛と支配の隠喩として解釈された。それはフランス系カナダが世界にたいして閉じられ、従属していることのものである。そのようなものは個人としても、集団としても断ち切らねばならないものだった。しかし、ケベックの個別の状況は、より一般的なものとも一致している。ダンテ以来、地獄下りの主題は多くの作家たちに創作のインスピレーションを与えてきた原型である。フランスの詩人 Pierre Emmanuel も 1941 年の『オルフェウスの墓』で探求した。Anne Hébert はその神話を再活性化する。彼女はファラオたちの墓へ下りていく「射すくめられた奴隷にも似た (Hébert, 1953, p. 71)」娘である。ファラオたちの墓は、フェミニズム的に解釈すれば、いにしえから存在する男性たちの掟の象徴であり—いまだにそう言えるだろうが—、そこに降りていくのは、「死者たち」を「暗殺し」てから、つまり彼らを自分たちの外に追い出してから、無傷の状態ですべて出てくるためである。奴隷の「手足」を縛

っていたものは「解かれて」いる。夜の冒険は夜明けの誕生で終わるのである。とはいえ、この夜明けはまだあまりはっきりはしていないのだが。

Anne Hébert は、沈黙と孤独の状態から、言葉をもち、友愛的な分かち合いへと早急に向かわなければならないと主張した最初の女性たちの1人である。詩人というのは「寡黙な兄弟たち (Hébert, 1980-81, p. 68)」の名において語ることを使命としている。魔術師ではないとしても、少なくとも「照らし出す者」ではある。

1960年6月22日、Jean Lesage 率いる自由党が選挙に勝つと、ケベックで「静かな革命」と呼ばれるものが始まる。政治や政府の上層部はカトリック教会と距離をとるようになる。1960年以降、国民詩が誕生し、フランス系カナダ人が「ケベコワ」になる。自由と詩的熱狂の雰囲気の中で、人々は自分たちがカナダの他の地域から自立しているのだと主張し始める。若い闘士たちが『立場』という雑誌を盛り立てるが、この雑誌は独立、社会主義、そしてときにはケベック特有の言葉であるジュアル<sup>9)</sup>をも推進する。

## 5. ガストン・ミロンが国民詩にもたらした多大な貢献

Saint-Denys Garneau と同様に、Gaston Miron (1928-1996) も1冊しか本を書かなかった。1970年に出版されて以来しばしば再版されている『修理された人』という本である。本が出版される前から、Miron はケベックで有名だった。彼はいたるところで、街角でさえ、自分の詩を朗読していて、それらを『リベルテ』などの雑誌に発表していたからである。社会主義の闘士で、早い時期から独立派だった彼は、あらゆる論壇に登場した。人々は彼の共同体や政治への参加に耳を傾け、敬意を表さずにはいられなかった。

Miron の詩の美しさはさまざまな主題の交錯にある。すなわち、質素な家庭の生まれであることから北国の風景のすばらしさにいたるまで、失恋から永遠に分かち合える愛にいたるまで、アイデンティティを奪われて集団全体が疎外された状況から、国家としてふたたび立ち上がり、新しい人間主義を獲得することへの希望にいたるまで、ありとあらゆる主題が織り交ぜられているのである。つねに未完成なそれらの詩は、互いに拮抗する力どうしの戦いに構造を与えてくれる詩句の効果的な作用に基づいた、表現上の強い緊張感をそなえている。例として、彼の「詩法」を引用してみよう。

ぼくは全速力で人生の30代を突き進んでいる  
ぼくはまだおまえを探している 愛が生長する土地よ  
ぼくは中にいる者を凍らせる40代の  
人間の冷たさを感じはじめ、恐怖にかき乱されている

ぼくは不幸せだ 母さん しかし母さんほどではない

ぼくの肉体を産んでくれた母さん、希望のために蜂起する母さん  
 うつむいてあえぎ悲しむぼくの母さん、  
 自分の手で時の編み目にかぎ針を差し込んで引き抜く母さん

別のとき、父さんは土になった  
 父さんは息子と道具を好み、ぼくの内部を進んでいく  
 父さんと母さんは、ふたりとも  
 地上のすべてのものを名づける方法を知っていましたね、父さん、母さん

あなたがたの平和が  
 雪のように降り積もっていくのが聞こえます… (Miron, 1998, p. 147)

話者は自分の個人的な不幸を、言うなれば過去との特別な関係の中に根づかせることによって払いのけ、鎮める。彼は、両親がしてくれたことや彼らの勇気に感謝し、彼らに対話の相手になることによって、自分の言葉を1つの系譜の中に位置づけ、死を超えた自己同一化の作業と時の経過がもたらしてくれる回復力を利用して、恥を誇りに変えていくのである。

## 6. ブローによる記憶

ケベック詩の概観を終えるにあたり、現存する中でもっとも重要な詩人の1人である Jacques Brault を紹介したい。彼は1933年生まれである。この賢者—といってよいと思うが—は、文体の誇張には強い嫌悪感をもっており、単純なものたちや人生の移ろいやすい瞬間の中に美を感じ取る。そのことは、彼が俳句や連歌など、日本の詩歌のある種の形式を好むことをも説明しており、じっさい、それを何度も実践することになる。

彼の苦悩に満ちた皮肉混じりの声は、「繊細な」言葉にたいする願望と、「他者の他者性を気遣いすぎること (Brault, 2006, p. 76)」からもたらされるものである。Nerval や Baudelaire、Saint-Denys Garneau や Miron を注意深く読む彼は、孤独あるいは憂鬱を含んだ明晰さという点でこれらの作家たちと共通している。Samuel Beckett からはわれわれ1人1人のうちに潜む浮浪者を引き継いでいる。彼が幼年期に懐かしい眼差しを向けるのは、人生のこの時期がものごとにたいする味わいを凝縮させているからである。

彼にとって、詩の言葉の唯一の目的は、われわれが説明し、自己正当化することをやめたときに、沈黙を導き入れることである。彼が Saint-Denys Garneau を読む読み方もそのように理解できる。Saint-Denys Garneau は「あらゆる危険を冒し、抑制されることのない身振り—これはいかなる創造にも必要なものだが—によって、ときとして、言葉を沈黙へと止揚し、文学を詩へと止揚した。空虚の言語、空虚を埋め尽くすものを取り除いた言語だ (Brault, 1975, p. 109)」。

彼の最初の詩集『記憶』に収められた詩編は1960年代の転換期に書かれたものである。ケベコワたちは「静かな革命」のまっただ中において、彼らの解放への願望は国家的<sup>10)</sup>かつ社会的な戦闘となって現れていた。しかし Brault がそれに全面的に参加することはなかったし、多少参加したとしても、そう長くは続かなかった。

タイトルが示しているように、この詩集は追悼のための努力であり、人々の意識に呼びかけるものである。時空を横断し、生きている人たちも死んだ人たちも呼び寄せる。詩人はそこで、失業状態にあった労働者の父親と、戦争に送られ、1943年連合軍のシチリア上陸作戦の際に戦死した兄のジルのことを思い起こす。つらい記憶は、互いに愛し合うことから生まれる希望と幸福を語る、より静かな詩とうまく調和している。

長いテキストの後に短いテキストが続くが、それはとりわけ幼年期や青春時代に味わった恥辱にたいしておこなわなければならない喪の作業を詩のかたちにしたものといっよよいだろう。屈辱感や剥奪感があらためて体験されるが、それは現在をふたたび活気立たせるためにほかならない。悲しみが明るみに出されるが、それは控えめで憂鬱を帯びた声によってである。ここでは言葉が過去から／を解放してくれるのである。それはこの表現の二重の意味においてそうである。つまり、「辛い記憶」がもつ特権によって、われわれを過去から解放してくれると同時に、過去そのものを修復してくれるのである。

死者たちとの一体感がしばしば現れるが、「友愛組曲」という堂々たる詩篇にあっては、それがケベック詩における比類のない叫びに変わる。この詩はその全体が兄のジルに捧げられているが、兄は「名誉のために死んだ」のでもなければ「平和のために」死んだのでもなく、「心の奥に卑怯な恐怖」を抱いたまま死んだのだ、と Brault は皮肉る。これは、個人の記憶と集合の記憶を突き合わせ、戦争の悲惨さや恐怖、そして社会的不正が彼に呼び起こす苦しみのいっさいを表現しようとする、怒った人間の叫びなのである。

「ぼくら」という代名詞の使い方は彼の仲間であるフランス系カナダ人との連帯感を表している。しかし描写は少しも輝かしいものではなく、Brault は攻撃的で冷笑的になる。

#### ぼくら

名もなき私生児  
どこの土地からともなく根こぎにされた者  
年齢不詳のニキビ面  
裕福な浮浪者  
快適で中途半端な反逆者  
大殺戮についておしゃべりするだけの者  
洗礼者ヨハネのヒモ

(Brault, 1965, 1998, p. 71)

あまりに長いあいだ内面化されてきた自分自身にたいする軽蔑は、仲間たいする、そして同時

に仲間のための反逆に変わる。そのような怒りは、さまざまな調子をそなえた「記憶」という長詩にあって、アウシュヴィッツや広島の大虐行を思い出すときに激しさを増す。この悪の否認は平和の熱っぽい擁護でもある。「ぼくがこうして昔の話をするのは、それらがまだぼくらの忘却の中に危険なまま残っているからだ／ぼくらの気質の中には、悪化して、復讐へと方向転換するものがあふれている。／ […] /だからぼくはおまえを迎えるのだ 記憶よ そして陰をつくってくれる太陽のように、おまえの声がぼくらの背後からのぼってくるのに耳を傾けるのだ (Brault, 1965, 1998, p. 84)」。父のいまわの際で、その叫びはより親密なものとなる。「そして父さんはもう少しで語り終え、疲れ切って跪き、最後の叫びを叫ぶ (Brault, 1965, 1998, p. 93)」。国を所有するには、記憶を再所有する必要がある。自由を手に入れるには、このような代価を払わなければならないのである。

## 7. おわりに

これら3人の詩人たちは各人各様に、ケベコワの剥奪の意識に内在している沈黙を表現しようとした。Anne Hébert は1980年にジャーナリストにたいしてこう打ち明けている。「ケベックの詩人たちは彼らの寡黙な兄弟たちをほんとうの意味で養っていて、自分たちの思いを語りながら、彼らの代弁をしていたのだと思います。それはケベックの解放においてとても重要なことでした (Hébert, 1980-1981, p. 68)」。こうしたさまざまなかたちで表現された闇の空間の横断が示しているように、1つの国民というものは、その不安定な偉大さを認識したあとでないと自由を獲得できないのである。これらの詩人たちに共通しているのは、言葉に重要性を与え、自分たちと世界、人々、そして事物たちとの関係を言い当てるのにふさわしい表現を探している点である。その点で、Anne Hébert は「原初の土地 (Hébert, 1972, p. 7)」への執着を語り、Miron は国民詩に呼びかけ、Brault は、われわれが異なっているということ、そして世界に帰属していることを示すために「国民的腐植土 (Brault, 1966, p. 38)」という考えを打ち出す。いずれにしても、記憶と明晰さという、互いに途中でしか出会うことのないものの特権によって明るみに出すべきなのは、暗い部分なのである。

(訳：小倉和子・立教大学異文化コミュニケーション学部教授)

### 訳注

- 1) 本稿は、2012年度立教大学招聘研究員ナタリー・ワテヌ氏(ケベック・シェルブルック大学教授)が4月23日に行ったセミナー« Naissances de la poésie québécoise »(異文化コミュニケーション学部主催)を改稿・翻訳したものである。
- 2) 当時、カナダは「ヌーヴェル・フランス」と呼ばれていた。ミューズはギリシア神話に登場する詩の女神たち。
- 3) ピンダロスは過度に叙情的な詩を書くことで有名なギリシア詩人。オードは定型の叙情詩。

- 4) 当時フランス系カナダ人は自分たちのことを単に「カナダ人」と呼んでいた。
- 5) 先住民とヨーロッパ人のあいだで毛皮の売買の仲介をしていた人たち。
- 6) カナダのアカディア人がイギリス支配に執拗に抵抗したために、土地を追われ、恋人たちが別れ別れになった悲劇を歌っている。
- 7) 詩の韻律や音楽性にこだわる 19 世紀フランスの文学流派。
- 8) サケに銚を打ち込むために先住民たちが用いる道具からとった名称。
- 9) Cheval (馬) をこう発音することから、ケベック俗語のことをこう呼ぶ。
- 10) ケベックをカナダの州としてではなく、1 つの自立した国家 (ネイション) と見なす考え方。

#### 参考文献

- Brault, J. (1965, 1998). *Mémoire*, Montréal: Les éditions CEC.
- Brault, J. (1966). *Miron le magnifique*, Montréal: Presses de l'Université de Montréal, coll. Conférences J.-A. de Sève.
- Brault, J. (1975). *Chemin faisant*, Montréal: Éditions La Presse, coll. Échanges.
- Brault, J. (2006). Remarques sur l'écriture de Gilles Archambault. *Voix et Images*, XXXI (2), 71-84.
- DesRochers, A. (1930). *À l'ombre de l'Orford*, Montréal: Librairie d'action canadienne-française.
- Évarturel, E. (1878). *Premières poésies 1876-1878*, Québec: Augustin Côté.
- Fréchette, L. (1887). *La légende d'un peuple*, Paris: La Librairie illustrée.
- Garneau, A. (1906). *Poésies*, Montréal: Librairie Beauchemin limitée.
- Garneau, H. de S.-D. (1937). *Regards et jeux dans l'espace*, Montréal: à compte d'auteur.
- Hébert, A. (1942). *Les songes en équilibre*, Montréal: Les éditions de l'Arbre.
- Hébert, A. (1953). *Le tombeau des rois*, Québec: l'Institut littéraire du Québec.
- Hébert, A. (1972). Les étés de Kamouraska ... et les hivers de Québec, *Le Devoir*, supplément littéraire, 28 octobre, p. 7.
- Hébert, A. (1975). Entretien avec Jacques Brault, émission radiophonique *Horizons*, Montréal: Radio-Canada, 11 et 18 mai.
- Hébert, A. (1980-1981). Anne Hébert et les eaux troubles de l'imaginaire, entrevue avec Donald Smith, *Lettres québécoises*, 20.
- Lescarbot, M. (1609). *Les Muses de la Nouvelle France*, Paris: Jean Millot.
- Longfellow, H. W. (1870). *Évangéline*, traduction française par Pamphile Lemay, Québec: P. G. Delisle imprimeur.
- Miron, G. (1998). *L'homme rapaillé*, Montréal: Typo.
- Nelligan, É. (1903, 1945). *Poésies*, Montréal: Fides, coll. du Nénuphar.